

創造性を広げる新たな発見を目指して
松下裕子

ピルゼンには2015年にも滞在し、欧州文化首都最初のイベントとなるライトフェスティバルで作品を展示し、PechaKucha Night でプレゼンテーションを行なった。二度目の滞在になる今回は、講師として現地の学生に自分の持つ知識や技術を還元する機会と、合わせてギャラリーでの展示と、二つの機会を頂き、私にとっても学びの多い貴重な経験となった。この機会を与えて下さった遊工房、西ボヘミア大学、ジャパンEUフェストにこの場をかりて改めて厚く御礼申し上げたい。

アートキャンプで担当したイラストレーションのコースでは、絵の描き方を教えるのではなく、紙という素材を使い、平面から立体への変容、そこから導き出せる空間的、立体的要素をイラストレーションに取り入れることを目指した。通常、イラストレーションというと、平面のなかでの構成、視点などが重視されるが、紙という平面と立体を自由に行き来する素材から、開く・閉じる、覗き込む、重ねるといった行為や視点にも意識を向け、発想を広げることが狙いである。生徒数は九人。そのうち二人は西ボヘミア大学に通っている学生で、その他は、日本（中国人留学生）、ロシアやウクライナからの学生もおり、予想以上に国際的なクラスとなった。紙に関しては折り紙しか知らないという学生から、ポップアップブックをいくつか制作したことがある学生まで、技術的なレベルには差があったが、観察や発想の転換に重きを置いたコースなので、各々の技術の差は全く問題ではなかった。

導入として、初日には日本での紙の空間的、文化的な使われ方を紹介した。障子や屏風、提灯、七夕飾りなどがその一例である。伝統的な使い方だけでなく、現代的な発展形（ブックアートやプロダクトデザインなど）もそれらの延長線上に見せることで、紙という素材の応用の幅広さと、多方向に自由に展開できる可能性を示唆した。技術的な面では、一枚の紙を折ったり切り込みを入れたりして、立体に起こすポップアップの基本的な技法を教えることが中心となるが、描画ソフトと機械を使ったカットなども上級者向けに盛り込んだ。しかし、技法の習得よりも、その制作過程で立体を観察し、新しい観点や意味を発見することにこのコースの目的がある。例えば折った紙には、そこに床と壁や内と外、切り抜いた穴にはネガティブ・ポジティブといった概念を形成することができる。また、それを開閉する行為は、明らかにする・隠すという行為に結びつけることもできる。ペーパークラフトという領域自体は一般的に知られていることもあり、単なる装飾に陥り易いという危険性もはらんでいるため、こういった形状や行為から引き出す意味を常に意識するようにアドバイスを心がけた。イラストレーションは物語性や物語形式と深く結びつきのある分野である。紙（物体）とそれを取り扱う対象（人）の間に発生する行為や空間に着目することで、物体自体を物語のトリガーにすることができたらと私は考えている。

コースの最終成果物は、紙を使うこと、立体的、空間的要素に着目することだけを定め、敢えてオープンにしておいた。結果、多様な作品が並び、生徒はお互いに多方向からのインスピレーションを受けていたように思う。興味深かったのは、最終的に数人の生徒が円柱もしくは360度に展開するような作品を作ったことだった。これは私から教えた形態ではなく、それぞれが色々な方法を試する中で引き出された形であるが、そこに付加されたストーリーや視覚的效果は様々であった。360度開く本の形を生かしループする物語を紡いだ作品、強さを競う猛獣達の物語を円柱状に繋いだ作品、中にライトを入れてランタンのようにした作品など、同じ形状でも多様な展開と視点が見てとれた。

五日間という日数は、じっくりと作品を発展させ制作するには短いですが、新しい視点や気づきを与える入り口としては丁度良い長さであろう。様々な場所から集まった生徒同士も、短いながらも濃密な時間を共に過ごし、コース終了後も連絡を取り合うような関係を築いていたようである。同時期に実に様々なコースが同じ屋根の下で行われ、最終日にはそれぞれの成果を発表する点がアートキャンプの面白い点だ。ここを起点に、参加者が新たな表現方法や興味を広げていく一端を担えたことを大変感謝している。

